

Title	ジャンヌ・ブイスヌーズ著 コンドルセー：大革命の中の啓蒙哲学者
Sub Title	Janine Bouissounouse; Condorcet. le philosophe dans la révolution
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.4 (1964. 4) ,p.351(81)- 356(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19640401-0081
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640401-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ような事情についてはかなり詳細にふれられている。

しかし一八八〇年代における新組合運動の勃興以後の本書の叙述は、主として労働者階級の政治的な関心、とくに労働党との関連においてふれられており、その限りに於いて労働組合の組織形態をとりあげていることなど、問題とすべき点は少くないが、それでも筆者独自の見解が至るところにみられる。たとえば著者は、新組合主義の特徴は、①不熟練および低収入の労働者の要求に合致すること、②低廉な入会費および組合費、③給付によるのではなくして、攻撃的なストライキの戦術、④雇用形態のいかんを問わず、労働者を組織することなどをあげ、一八八〇年代から九〇年代にかけて、社会主義が労働者階級に大きな影響をあたえたことを認めながら、それがたとえT・U・C・内部において圧倒的な勝利をえたかのように説くウェップ夫妻とコールの見解に反対している。すなわち、もしそうだとすればさきさきのべたようなT・U・C・の代議員の選挙規則の改正は行われなかつたはずであるというのであり、T・U・C・そのものを指導者の権力闘争の場として把握しているのは正しい。また二〇世紀初頭のいわゆる「労働の大不安」(The Great Unrest)の原因についても、①一九〇九年から一三年に至る物価の上昇にとまなう組合の産業行動、②労働党の失敗、③マルクス主義およびサンディカリズムの浸透、この事件を契機とする三角同盟の萌芽——産業別労働組合への方向への起点として把握。

一九一四年から二六年までの第一次世界大戦、戦後そしてゼネラル・ストライキとつづく一二年間は、労働党の戦争協力、そしてさ

らには第一次労働党内閣にみられるような政府にたいする反対勢力から政権担当者としてのブルジョア勢力との妥協抱合の時期であった。その間に、ロシア革命および戦後の深刻な経済危機などの問題をばらんで、労働運動は左右に動揺をつづけた。著者によれば、この時期の組合運動の特徴は、古い組合勢力としての「石炭業および綿業の組合の力は相対的に衰え、運輸一般労働組合にみられるような新しいゼネラル・ユニオンが運動の指導権を掌握するに至った」(pp. 180~181)。この時期における最も大きな問題は、労働党政府と労働組合の指導部としてのT・U・C・との矛盾であり、とくに、一九二一年にT・U・C・の総務委員会(The General Council)が設立されて以来、政党としての労働党とT・U・C・との矛盾は一層激化したことである。それは、指導者W・J・ブラウンの一九二五年のT・U・C・におけるつぎのような発言からよみとることができ

「下院における労働党の完全な多数派、従って安定的である労働党政府をもってさえも、一方における政府、他方における労働組合の間には、永久的な見解の相異が存在するであろう。…労働組合というものは、政府の機能よりも、遂行すべき異なる機能をもつものだ」(p. 172)。

運輸・鉄道および石炭業の労働者のいわゆる三角同盟を主体とするゼネ・ストが失敗せざるをえなかつた理由はすなわちそこにあつた。

もちろんこのような対立は、一九三〇年代におけるファシズムの

脅威に対抗するための統一戦線の結成、さらにそれにつづく第二次世界大戦の過程において緩和されてゆくのであるが、ゼネラル・ストライキとつづく一九二七年から三九年までの間に、組合運動は、ゼネラル・ユニオンがいちじるしい発展を示した。全国繊維産業労働組合(National Union of Textile Workers)や運輸および一般労働組合(Transport and General Workers' Union)、一般および自治体労働組合(General and Municipal Workers' Union)などの大組合が出現して、労働市場における独占的地位をしめたのである。著者はさらに、一九三九年から五一年までの第二次大戦中および戦後の労働党内閣のもとにおける労働組合運動、その労資協調的な傾向と、その後、保守党政権のもとにおける労働組合の停滞的な傾向についてくわしくふれている。

本書はさきさきのべたように、労働運動史の入門書として、すぐれた明快さをもっている。よみ終つて感ずることは、コールやモートン、アレン・ハットおよびウェップ夫妻の通史と比較して独自の個性をもち、とくに著者の研究領域である労働党史の叙述および労働党と組合との関係においてみるべきものがあるが、しかし叙述が分析的でなく説明的であり、立体的な視角に欠けているように思われる。組合運動の流動的な側面については非常によく描かれているが、組合相互間の関係や対立関係などの矛盾する側面の分析は、たとえば沖仲仕労働組合と運輸および一般労働組合の間の仕事区分の問題(demarcation dispute)などにおいて多少ふれられているが(pp. 243~244)、比較的稀薄であるように思われた。しかし労働組合の動

きと労働党との関連を克明に追求したものとして、すぐれた入門書といふことができる。

(London, MacMillan and Co., Ltd. 1963, ¥2520)

ジャンニヌ・ブイスマーズ著

『コンドルセー』

——大革命の中の啓蒙哲学者——

Janine Bouissouneuse; Condorcet. Le Philosophe dans la Révolution, Hachette, 1962. pp. 319.

野地洋行

ダランベールの親友、大臣チュルゴアの協力者、ヴォルテールの知己、つまり百科全書派の一員であるとともにその正統の相続人としてフランス革命の中に生き、その一端をになつたコンドルセ侯爵は、その波瀾の生涯によって伝記作家の興味をそそるばかりでなく、われわれ社会科学を学ぶものにとつても、一つの思想の実験者として重要な研究対象である。

フランス革命は啓蒙思想によってひきおこされたのだ、というような一面的な解釈を生むほど、フランス革命に果した啓蒙哲学の役割は大きかつたが、それだけに、啓蒙哲学者が革命の現実の中でどう思考し、どう行動したかは、啓蒙哲学そのものの性格を明らかにする上に大変重要な問題となってくる。革命は啓蒙思想の社会的実

験の場であったともいえず。そしてこの実験を身をもって遂行したのがコンドルセであった。それゆえわれわれがコンドルセをとりあげる場合、かれがモンタニヤールの追跡と、死の影に直面しながら人類の未来に無限の希望をよせ、「人類精神進歩の歴史」をかいた、という劇的場面をみるだけでなく、その思想と行動の中に、かれの思想の社会的性格を見とすことが必要であろう。少なくとも評者はそういう見地からこの伝記的研究を手にした。

本書は次の十四章からなる。序言、(I)、善良なるコンドルセ、(II)、雪下の火山、(III)、公共福祉への熱中、(IV)、光明の世紀における何たる汚辱、(V)、マリー・ソフィード・グルーシー、(VI)、共和憲法が最善、(VII)、人権、(VIII)、王制は終わった、(IX)、国民の教育、(X)、危機の革命、(XI)、ロベスピエールとコンドルセの対決、(XII)、王の死、(XIII)、公権喪失者、(XIV)、最後の歩み。

「大革命の中の啓蒙哲学者」という本書の副題とこの構成から明らかのように、本書ははじめコンドルセを中心としてその出生から論じはじめるが、やがて主題はむしろ革命の進行に移り、今度はそれに則して、コンドルセの役割が論ぜられるようになってくる。

リブモンの町に駐屯していた軍人の子として一七四三年に生まれたコンドルセは、一七六二年パリに出て、若き幾何学者として名をあげた。数学者として洋々たる前途をもちながら、ダランベール

との出会いがかれの生涯に大きな影響を与える。一七六九年に科学アカデミーに入り、一七三三年、その常任書記となったが、一七七〇年、フェルネーでのヴォルテールとの会見はコンドルセに決定的影響を与え、かれはますます幾何学者から批判的政治思想家へ、数学者から社会学者へと転身してゆく。かれの幾何学者からの転身、発展はチュルギーによって経済学的探求へとみちびかれたとき以後である、といわれることがあるが、著者はヴォルテールとの会見が決定的であったことを強調している。だが、かれの思想的発展は方法的にはつねにかれの科学的方法の延長線にあつたのであり、かれは終生、この方法に忠実であつた。(二章)

かれの関心は次第に社会的政治的なものへと移ってゆく。かれはチュルギー、ケネー、ヴォルテール、ダランベールとともに、小麦取引の自由を擁護した。小麦の問題は当時すべての精神界の人々の心をとらえていたのである。かれがその視野を幾何学から政治社会へと拡大した契機として、かれがアカデミーのならわしにしたがつて、過去に死亡したアカデミー会員の賛辞を多数書いたことがあげられる。かれはこれによって、批判的歴史家としての眼を養うことになった。ヴォルテールはその賛辞に対して次のような意味のことを書き送った。「あなたの賛辞はまことにすばらしく、人々はそれを読むためには、毎週アカデミー会員が死ぬばいと思つていくらいです」と。コンドルセ自身は次のようにいつている。「私はかれらへの賛辞よりはむしろ、かれらがものがたるもの (Gothic) について語る。なぜなら、生きているものにとって有益なもの――

真理と正義――よりも、死んだものにより多くの恩恵を蒙ることはないからだ。」(四四―四五頁)(二章)

一七七四年、大臣となつたチュルギーを助け、その思想の宣伝者、その政策の遂行者の一人となつた。チュルギーとの友情は、ダランベールやヴォルテールの共感、激励、賞賛よりもかれを励ます。(六〇頁) そのチュルギーの政策とは何か。それは穀物取引の自由、賦役の廃止、人頭税の低減、国内関税の除去、同業組合の廃止、そしてもう一つ、普遍性をもつた協議会の設立である。チュルギーの任命により、コンドルセは造幣検査官となり、また、ダランベール、ポッシュとともに航海監督官となつた。チュルギーが王国に豊富をみちびくため、人民に食糧を確保する手段として、川や運河の結合を考えたことを思えば、この地位はきわめて重要なものであることが判る。一七七四年九月、穀物の自由取引、外国小麦の輸入が決定された。だが、不幸にして、一七七四年は不作の年となり、この政策の効果は不作の影にかくれてしまう。この頃、コンドルセは「賦役についての考察」等、次々と著作をあらわし、国内及び国際的取引の自由を擁護し、重商主義政策を批判した。(七〇―七三頁) ネットケルは「ジュネーヴの高利貸」として憎悪されている。だが、かれは経済学者よりは百科全書派であり、心からのヒューマニストである。エドガー・フォーレは次のようにいつている。「かれは政治的党派の間では当代の代表的な自由主義者であるが、それはちょうど、チュルギーが経済的党派の中で代表的な自由主義者であるのと同じだ。」(七七頁) だが、チュルギーの失脚は、ふた

たびかれを幾何学と哲学の研究の中につれもどす。(三章)

人民の福祉へのかれの活動は短くして終つた。だが、この人民の福祉へのかれの努力はただ経済、社会の領域にとどまっていた。かれは司法制度にも挑戦する。人格を無視する野蛮な、時代おくれの司法制度がかれの攻撃にさらされる。それは刑法の野蛮さに対するヒューマニストとしての抗議であると同時に、「刑法が残酷、抑圧的であればあるだけ、議会は強力だ」とかれがいつていることかろうかがえるように、(九四頁)それが専制的支配の支柱の一つであることへの批判もふくめられているように思われる。(四章)

やがてコンドルセは結婚する。相手の名はマリー・ソフィード・グルーシー。彼女のサロンはイザンベールによれば「啓蒙ヨーロッパの中心」となつた。そこには高名なフランス人ばかりでなく、トマス・ペイン、アダム・スミス、ベツカリア、フランクリン、そしてジェファソンの子息たちが入り出するだろう。この妻はトマス・ペインの著作を仏訳し、スミスの「道徳情操論」の翻訳を企てることになる。(五章)

さて、幾何学から政治と社会に目をむけたコンドルセは、やがて、その政治理論において共和主義者となつていつた。何がかれにそのような展開のきっかけを与えたのか。その一つは新しい国アメリカの憲法である。かれはアメリカの憲法を注意深く読んだ。コンドルセばかりでなく、チュルギー、ロシュフォーもまたそれに心をうばわれた。コンドルセもまた、「政府はその正当なる権力を被治者の合意からうけとつてゐる」と考えるようになる。かれはア

メロカ独立の経済的影響にも無関心ではなかったが、かれがもつとも心をひかれたのは、自由意志によつてつらぬかれた諸制度の上に立つ国家の成立であり、神権に対する自然権の勝利であった。(二二四頁)かれは論文「ヨーロッパの世論と法制に与えたアメリカ革命の影響」を書く。かれは、アメリカが一般的繁栄と正義とを和合させようとしている唯一つの国と考える。奴隷制も長くこの国の名譽を汚すことはできないだろう。だが、コンドルセーは、人間が平等であり、人民が主権者であるとのべながら、他方では、投票権は財産所有者に限定されねばならないと考へた。だが、かれにあつては、労働と所有とがまだ分離・対立するものとは考へられていない。だから、かれは考へる。下男は主人のする通りに投票するものだ。だから、もつとも小さな財産にも都市の特権が与えられるならば、大多数のものは選挙権をもつのだ、と。こうしてかれは共和憲法こそ最良の憲法である、と考へる。こうして、かれは国王のヴァレンヌの逃走以前、一七八八年にすでに、最初の共和主義者の一人であつた。(二二八頁)アメリカの影響とならんで、ペインとの出逢いがかれに決定的影響を与える。だが、かれはその理想において共和主義者であつたとしても、その同時代人全部がそうだつたように、現実的には君主制論者であつた。それは、国民に自分で事を処するにふさわしい知識が欠けていることを心配したからである。かれの教育論は多分ここにその必然的出发点をもつのであろう。(六章)

ところで、この辺りから、コンドルセーの個人的人生航路は大革

命の嵐の航路と入り混り、その一部にまぎこまれてゆき、本書の著述もかなり革命の経過の叙述にあてられている。その革命の経過はコンドルセーに次のことをおしえた。つまり、人民は無知であり、本能の赴くままに行動するというかれの考へに反して、人民が自由のために成熟していること、これである。この認識はかれを直接行動にかりたてた。かれは普通選挙の原理をすっかり適用してよいこと、急進的な民主的品格を憲法に与えてよいこと、を主張する。かれはバリの代議士の集りから出発したコミューンの憲法委員会の議長となる。かれは新しい政体の原理、原則としての人権宣言の必要を強く主張していつている。「市民にその権利を知らせることを拒むのは不正であり、ほとんど専制的行為であらう」と。(七章)

だが、かれの共和主義がもつともはつきり現われているのは、一七九一年、ヴァレンヌ逃走の際、かれが発表した「共和制について」である。この演説は大きな影響を及ぼし、かれはバリより立法議会に選出された。ここからかれの政治行動への直接参加が始まり、本当に革命期の立役者となるのである。だが、かれのこの政治的活動の部分は、むしろフランス革命史そのものの領域に属し、その教育改革案(九章)は別として、われわれの思想的視点からは詳述する要はないであらう。(八・十章)

むしろ、コンドルセーの思想の社会的性格をよく照らしだしているのはそのロベスピエールとの対決の場面である。マラー、シャボ一等もコンドルセーを憎んでいたが、かれの最大の敵はやはりロベスピエールであつた。コンドルセーの逮捕の断を下したのもロベス

ピエールであつた。著者は次のようにこの対決を叙述している。

「実際、人々が考へはじめたのは八九年の革命、つまり、百科全書派の人々がのぞんだ自由主義革命の終幕についてであつたのだ。別の革命が始まつていた。その革命はこれら同じ哲学者を拒み、かつ、まもなくコンドルセーを崇拜すべき一切の理由が、かれを憎悪させるための理由となつて、逆にかれにふりかかつたのである。なぜなら、この著名な思想家が山岳派の人々の攻撃的となることになつたのは、ただ、かれがジロンド党員の友人だからというだけではなく、むしろ、啓蒙哲学者の代表者だからなのである。」なぜ、啓蒙哲学の正統をひくがゆえにコンドルセーはロベスピエールの攻撃的となるのか。それはロベスピエールの精神的な師はルソーであり、「社会契約論」はそのバイブルであつた)そしてそのルソーは百科全書派から「迫害」をうけたからである。つまり、ロベスピエールは師ルソーの迫害者への憎しみを自然にコンドルセーに向けたのだ、と著者はいつている。この場合、著者は二者の対立、そしてルソーと百科全書派の対立を単なる感情問題、歴史的必然性のない行きがかりに倭小化しているわけである。著者はこの二人の対立は事の中心にあるのではないのだから、誤つた政治的重要性を与えてはならないといつている。(三三四頁)なぜなら、二人はともに「黒人の友の会」に属し、ともにジャコバンであり、コミューンの擁護者、ともに一七九一年の憲法の擁護者であり、二人は対立よりも共通点を多くもつているからだといつている。

だが、また、他方で著者はミシェル・コリネにしたがつて、この

二人の対立を次のようにも説明している。ジャコバンの理想は自由および幸福であらう。だが「ルソーの鼓吹する自由とは「一般意志」といふ集合的存在の中での完全な個人の放棄と同義である。それこそまさに、ロベスピエールとサン・ジュストが自由と幸福という言葉をもつていわたししていることなのだ。」(三三七頁)だから、ロベスピエールが人間の完全な解放を追求する百科全書派の生き残り根絶やしにしたいと思つるのは当然なのだ、と。ロベスピエールの思想は人権とは何の共通点ももつていないのであり、その恐怖政治は単に政治的必要から生じたばかりでなく、その思想の必然的帰結なのである、と著者はいつている。そして、結びに、ロベスピエールが専制主義や二〇世紀全体主義、つまり、ファシストあるいは共産主義(このように同列におかれてゐる)の体制の序幕である、とのべ、人権の確立、人間の解放の主張者として暗にコンドルセーを賞賛している。

さらに、人間の無限の進歩と完成可能を信じたコンドルセーがしばしば夢想家とみられ、ロベスピエールが現実家とみられるが、著者はこれにも反対していつている。つまりコンドルセーとチュルゴーはミスとともに、経済組織を変革したイギリスの産業上の発展を知悉していついたが、「至高存在」について思いをめぐらせていついたロベスピエールはそれを知らなかつたのである。マルクスがいつうように、ロベスピエールの失敗の原因は、この事実への認識不足、新しい社会形態の発生への無知、生産力に結びついた力の否定にあるのであつて、われわれはむしろコンドルセーをこそ現実家とすべきである。

とのべている。(十二章)王の処刑とシロンド党の敗北、(十二章)コンドルセーへの逮捕状と地下生活、「人間精神進歩の歴史」の著述、そしてその死、(十三・四章)については革命史の一部としてよく知られているので省略する。

さて、コンドルセーの思想の社会的性格をよみとるといふ最初にあげた視点から批評をこころみれば、とくに十一章でとりあげているコンドルセーとロベスピエールの対立は、単なる感情的対立ではもちろんなく、思想そのものの対立、つまり百科全書派とルソーの思想的対立であり、さらにはかれらが代表する革命的諸階層間の対立の表現であるといえよう。歴史の発展を新しい産業社会と生産力の発展とに結びつけ、人間社会の進歩に信頼したコンドルセーと、古代スパルタになぞらえた有徳の国によって近代ブルジョア社会にくつわをはめようとしたロベスピエールとの対立は、実は、フランス革命の渦中にあつた諸階級、ブルジョワジーと、共同的権利にしがみついた農民との間の対立としてみることもできるのである。

ところで、歴史は現在と過去とのつきざる対話であるといわれるが(E・H・カー)、歴史家が現代をどうとらえているかは、かれの著作に決定的な影響を与える。

本書の著者はコンドルセーの重要な歴史的地位を認め、その地位を再興せよとする。フランクリンやジェファソンがアメリカ人の父であるように、フランス共和主義者にとってコンドルセー

はその父祖なのではないのか、と。だが著者が現代をただ、政治的に民主主義社会としてのみとらえ、さらにはフランス革命をただ、専制から共和制へ、暗黒から光明への移行としてしかみないならば、かれはコンドルセーを無制限に理想化し、他方では逆にロベスピエールの役割を正確に評価できなくなるだろう。つまりかれは、コンドルセーとロベスピエールの対立の中に、人権の擁護者と独裁者の闘争しかみないのである。(序文)そこには歴史を理解するのに必要な経済的概念が不足しており、近代と前近代、自由と独裁というような、ごく僅かな分析用具しかないのである。

だがいままでもなく歴史家は現代を資本主義社会として、一つの階級社会として経済学的にとらえることが必要である。そしてフランス革命を、フランス資本主義が成立するための一過程として把握することによって、はじめてコンドルセーの位置もより高い段階で明らかにされるだろう。さし当ってわれわれは本書のような研究を手がかりに進まねばならないが、ルフェーヴルらの革命史研究が、その経済的変革過程の追求に深くつきすすんでいるのを見るとき、思想史研究も、その成果をくみつくすよう努力すべきであることを痛感する。

新刊紹介

大河内暁男著

『近代イギリス経済史研究』

最近我が国西洋経済史の学界では、産業革命期の研究が盛んになりつつある。ところで産業革命を単に技術史的観点、或は経営史的観点から分析するのでは、十分ではない。そのような観点はそれ自体重要ではある。しかし産業革命そのものが一国民社会全体が、封建的再生産から資本制的再生産へと構造変革したことを意味する以上、産業革命研究も社会的再生産構造の歴史的展開を研究の焦点としなければならない。そして国民社会全体の再生産構造の歴史的展開は、いきおい資本制的国内市場の発展と密接な関係を有するのである。ところで資本制的再生産構造といふ、資本制的国内市場といふ、それらは、個別分業(作業場内分業)の全面展開によつてもたらされる従来の手工業的小生産の否定、この結果必然的におこる農民及び手工業者の没落、そして新たに興りつつある発展せる個別分業内部への没落農民、手工業者の包摂(勞

働力の商品化)等の諸過程を前提として成立する。さらにこのような資本制的関係の本源的形成そのものが、従来の農民、手工業者の小商品生産者としての成長の程度如何に左右される。このような連鎖的前提条件に基づき一

国の産業革命の構造的特質が決定されるのである。すなわち小商品生産者の成長が大幅に許される事情の下では、前記の諸過程は徹底して進行し、しかもそこから極めて底の深い資本制的国内市場なり、資本制的再生産過程なりが形成されてくる。逆に小商品生産者の成長が、何らかの程度で、阻止せられる事情の下では、底の浅い国内市場で再生産構造が形成されてしまう。ところで資本制的関係の本源的な形成過程においては、一方で確かに個別分業(作業場内分業)の展開過程を基軸とするが、他方でこの展開過程に呼応した社会的一般的分業過程の展開過程が進行する。これこそ資本制的再生産過程の内容である。それは個別(作業場内)分業の発展に即応した社会全体の財の交換過程の確立でもある。このような財の交換過程こそ、資本制的国内市場の内容である。それは私的原理に基づき、労働力の商品化を基本条件としている以上、商品生産の全般化という形で進行する。商品生産の全般化とは、全国的に自由な競争の成立

を意味し、一物一価の法則が貫徹することを意味する。そして資本制的再生産過程の成立と、個別分業の発展と資本制的国内市場の形成とは、相互に相補しつつ、全社会的構造変革を完成して行く。

本書は以上簡単にのべた産業革命の理論的、構造的把握をもちつつ、世界史上初めて産業革命に突入したイギリスの一八世紀全般の経済史的分析を意図したものである。特に、資本制的再生産の基軸工業部門とされる鉄工業を中心としつつ、国内市場の形成過程と個別的分業の展開過程に最大の重点がおかれている。国内市場の形成過程については、第一章「西部ミッドランドズ金属工業からみた一八世紀イギリスの市場構造とその発展傾向」、第二章「道路交通からみた一八世紀前半のイギリスの国内市場」、第三章「一八世紀前半イギリス国内市場の価格組織——いわゆる『ビュドリ相場』とその意義」、個別分業の展開過程については第四章「一八世紀、パーム・ガム・ブラック・カントリ地域の金属工業の経営形態」、第五章「一八世紀前半イギリス製鉄業の経営とその企業形態」においてそれぞれ分析が行われている。この他第六章に、製鉄業保護政策の分析が追加されている。